

## <CIEC 第59回研究会 報告>

『学生どうしの学び合い』を基軸にした、大学生協のスキルアップサポート」

日時 2005年12月17日(土) 18:30~20:30  
会場 パシフィコ横浜 会議センター3F  
報告者 武内 大隼(北海道大学)・小野田 陵二(京都大学生協)・  
原田 隆嗣(麻布大学)  
パネリスト 小林 昭三(新潟大学)  
参加 37名(教員3名、学生・院生15名、生協職員19名)

### ●開催趣旨

まもなく2006年を迎えようとしていますが、教科「情報」を学習した新入生が大学へ入学してくる2006年、大学全入時代を迎えると言われている2007年、国立大学の法人化、取り組みが拡がりつつあるパソコンの必携化など、大学でのコンピュータ利用環境に影響をおよぼす大きな変化が、この数年間で起こりつつあります。これらの変化によって、私たち大学生協の教材・学習用パソコンの販売・サポートはもとより、大学における情報リテラシー教育も大きな転換期を迎えていると言えます。

これまでCIEC生協職員部会が企画したPC必携化についての研究会では、大学と生協のパートナーシップ構築において、「大学の教育・研究内容に根ざしたサポートや学習機会の提供」が一番重要なポイントとなることが議論されてきました。

こうした流れの中、CIEC生協職員部会では、これまでのアフターケア型や教育型の学習機会だけでなく、『学生どうしの学び合い』による学習機会にこそ、今後の大学キャンパスにおけるコンピュータ利用学習のあり方についてのヒントがあり、「学び合いの場」の提供が私たち大学生協の責務になっていくのではないかと考えています。

今研究会ではその裏づけとして、近年各地の大学生協で行なわれつつある、学生のキャリア形成も視野に入れた『学生どうしの学び合い』を基軸にした取り組みについてご報告いただき、今後の展開や展望について議論できればと考えています。(以上開催案内文より抜粋)

### ●報告

開催趣旨にもあるとおり、この間の情報教育及びコンピュータ用環境の大きな変遷により、コンピュータの提供・サポートなどにおいて、わたしたち大学生協に求められるものも大きく変わりつつあります。そうした中、大学の情報リテラシー教育を補完する役割を担うべく、各大学生協でいわゆる「パソコン講座」の取り組みがなされてきています。

近年の大きな流れとしては、学生中心の組織である大学生協らしく、入学時にコンピュータを購入した学生に対し、先輩である上級生がカリキュラムの作成も含めて「パソコン講座」を運営し、実際に教える立場に立つというスタイルが確立されつつあります。

このことは新入生が「パソコン講座」という導入時教育に親近感を持って入り込めるということだけでなく、教える側に立つ学生自身も、その運営課程において自ら学習・成長しているという成果に基づくものだと振り返られています。

こうした取り組みに対し大学の教員からは、単なる販売にとどまらない大学生協の取り組み姿勢、学生同士の主体的な学習態度や、正課の情報教育ではまかないきれない(あるいは取り扱

にくい)内容についても多くの学生に学んでもらえることなどについての評価が出されつつあります。

このような背景をもとに設定した研究会に、多くの学生に加え、教員の方のご参加も得られたことそのものも、これらの取り組みが持つ意味に共感を抱かれたことによるものと感じております。以下に実践報告とパネルディスカッションでの議論内容を簡単ですがまとめさせていただきます。

京都大生協の小野田さんからは、学生が講師となり行なった問題解決型のPC講座についてご報告をいただきました。前年までの経験をもとに、他大学の実践例も取り入れることにより、受講生や運営に関わった学生、大学の教員からも高評価を得られたようです。アプリケーションの機能そのものを細かく指導するのではなく、課題を与え対処方法を学ばせることで、受講生が自発的に成長していくことを目指した運営がなされています。そのことにより、講座開始当初はまったくわからなかったメールマナーが身についたり、実際の講義でのプレゼン課題をスムーズにこなせるようになったりといった成果が見られています。教員からも、大学では教えない内容(レポートの書き方など)についても取り上げているといった面で評価をいただいたそうです。

麻布大学の原田さんからは、「学生が使うものは、学生が一番知っている」ということを前提に行なったパソコン提案の取り組みについてご報告をいただきました。パソコン講座についても学生が行なうことにより、運営する学生自身も学習・成長することができることが大きな魅力であることが語られ、「学生が使うものは、学生が一番知っている」という前提に立つと、学生が中心となって大学生協がパソコン講座を行なうことは、ごく自然な流れであると提起されました。

北海道大学の武内さんからは、新学期パソコンの機種選定・販売、パソコン講座の企画・運営、そしてサポートまでの一環を学生の手で行なっているPCマスターズの活動についてご報告いただきました。「大学生活に必要なパソコン活用能力を習得すること」を目標とした場合、必然的にゼミでのプレゼンやレポートの体裁、フリーウェアの活用方法などが題材としてあがり、そうした面から経験豊かな先輩学生が新生生に対し教えるということに意味が出てくる、そうなれば当然、高校や大学の情報教育とは別の役割を果たせるのではないかとの提起でした。今後の課題としては、デジタルデバイドの問題や、情報モラル教育、情報教育の大きな変遷の中での全国的な情報共有の必要性などがあげられました。

パネルディスカッションでは、まず小林先生から、それぞれの取り組みにおいて、学生自身が柔軟にプランニングから運営まで行なうことを通して、自ら力をつけていること、そのことにより学生の持つパワーがより一層強まっていることに対しご評価をいただき、またご自身の大学でのTA導入の取り組みのご紹介とあわせて、一連の取り組みにより「あらゆる学問は学び合いたいということを学生自身が理解しつつあるのではないか」とお話いただきました。

以下が会場を交えた討論のポイントです。

- ・ 学生が潜在的に持つパワーを、「学び合いの場」を作ることで生かしていくことの重要性
- ・ 情報教育という分野は、排他的な専門領域ではなく、重要なのは教える側の資格ではなく、教える側・教えられる側にとっての成果

- ・ だからこそ、学生自身がコンテンツ作成や運営に関わることの意義があるのではないか
- ・ 大学の正課の情報教育と学生同士の学び合いは相反するものではなく、連携・補完し合うことで「学ぶ機会」をより一層広げていくことができるものである
- ・ 今後の懸念事項は、セキュリティやモラルといったITリテラシー教育と、デジタルデバイスへの対応であり、これは正課の情報教育でも同じことが言える

●まとめにかえて

大学生協という立場からは、「学生同士の学び合い」を継続発展させていく上で、その事業化と組織化がわれわれの大きな使命であると考えています。

その視点でこれまでの各大学における実践をとらえると、『「教え合い、学び合う」という関係性は、大学内の人的資源活用のサイクルを生み出すものであり、キャンパスコミュニティーの拡大再生産を促すものである』というわたしたちの仮定が実際の成果として証明されつつあると言えるかと思えます。

そうした意味でわたしたち大学生協は「学び合い」の育成が、情報教育だけでなく様々な場面で、学生のみならず教職員も含めた大学総体としてのキャンパスコミュニティーの発展へ、貢献できるものひとつであると確信した上で、今後より一層取り組みを強めて行く所存です。

(文責 内赤 尊記/CIEC 大学生協職員部会)